談話における直接目的語の遊離構造について

Floating Structures of Direct Object in Japanese Discourse

YASHCHUK Halyna*

（要旨）

話し言葉による談話において、述語を修飾する文成分として一般的に論じられてきた直接目的語は、述語から離された状態で出現することがある。その際、発話の構造がどんな形式を取るのかということについて本稿で考察する。

自然談話のデータ（テレビトーク番組より収集した会話）分析を通して、直接目的語が述語から切り離されている発話構造（遊離構造）にはいくつかのパターンがあることが分かった。直接目的語が述語から切り離される現象を「遊離現象」と呼ぶと、それぞれのパターンにおいて、遊離現象を伴い直接目的語と述語の間に他の要素が出現することがある。それらをまとめると、遊離現象が起こるには、「命題実現」と「談話進行管理」という主な要因が2つあることが分かった。2つの場合においては、直接目的語の振舞いも異なる。命題実現によって遊離が起こる場合、直接目的語は構造的に孤立させられる構造が形成される。また、それと異なり、談話進行管理によって遊離が起こる場合、直接目的語の出現が他の要素が現れることの原因となる構造が形成される。

【キーワード】直接目的語、遊離現象、挿入要素、心内処理、談話的有力成分

1．はじめに

話し言葉のひとつである自然談話において、そこでしか現れない発話構造を観察することができる。例えば、以下の例にあるような構造が可能である。

(1) マスター：そのあと、粉の表面の中心から「の」の字を、そうそうそう、描くように、お湯を注いでください

この発話は、コーヒーの淹れ方を説明するもので、ペーパーフィルターに入れたコーヒー粉にお湯を注ぐ方法を話者が教えている。ここで特徴的なのは、直接目的語成分「「の」の字を」と述語「描く」とが隣接しないという点である。発話の場面は、話し手が聞き手を目の前にして説明するのと同時に、聞き手が指示に従ってコーヒーを淹れる場面である。「「の」の字を」と話し手であるマスターが発した瞬間、生徒である聞き手がお湯を注ぎ出したとすると、マスターがそれを見て、言い出そうとした自分の発話を一旦止め、「そうそうそう」と相槌を入れる。

このように「「の」の字を描く」という直接目的語［N を］と述語［V］の間に挿入要素「そうそうそう」が入れられ、二つの成分が切り離される構造が成立するのである。(1) の発話に伴う聞き手の動作と同様に、自然談話の流れに伴う様々なプロセスの影響が、会話参加者の発話の構造に反映され、遊

* 山口大学大学院東アジア研究科（The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University）

Journal of East Asian Studies, No.14, 2016.3.（pp.17-32）

離構造は形成されているのである。本稿では、直接目的語を含む遊離構造について検討を試みる。

直接目的語（以下、目的語ともいう）［N を］（対格の名詞）が、述語［V］（他動詞）と隣接する構造を「連結形」と呼ぶ。それに対して、［N を］と［V］の間に他の要素が挿入され、［N を］と［V］が離れる構造を「遊離形」と呼ぶ。本稿では、目的語の遊離形の中に出現する挿入要素とは、ポーズを含む談話標識のような要素並びに、［N を］と［V］の間に入る修飾成分と、発話の非流暢性によって挿入される文（丸山岳彦（2014：96-99）が分類する「挿入構造」参照）を検討の対象とする。

遊離形の構造を次のように記号化する（「Ob」は “Object”（目 的 語）、「Pr」 は “Predicate”（述語）の略号である）。挿入要素（(1) では、「そうそうそう」に当たる部分）をεで示す。また、「⤙」と「⤚」の記号は発話の中で遊離が起こる箇所を示す記号である。

［N を］$_{Ob}$ ⤙ ε ⤚［V］$_{Pr}$

このような形を持つ遊離形では、いくつかのバリエーションが可能であり、それらの仕組みを記述することが本稿の目的である。

2．先行研究における直接目的語の捉え方

文構造の中で、動作の対象という役割を果たす直接目的語成分と動作を表す述語成分を「動詞句」でまとめる扱い方が一般的であろう。

日本語学では目的語の考え方は主に2つに分けられる。述語が表す動作の意味を補完する機能が指摘され、目的語に当たる成分を「補語」と呼ぶ立場がある。仁田義雄（2010：119）は、述語と意味的関係を結ぶすべての成分を「共演成分」と名付け、「共演成分は、述語成分の表す動き・状態・属性の実現・完成に必須的に参画する関与者を表す成分である」と定義する。述語なしでは出現しない目的語は「共演成分」のひとつとして挙げられている。

また、「動作」の具体化を行う直接目的語の機能を重視する立場もある。それは「補語」を提供する考え方に近いものであるが、［N を］を連用修飾の一種として見なすのである。加藤重広（2003：74）は、意味的・機能的・構造的修飾という三つのカテゴリーを導入し、その観点から修飾成分について論じる際、目的語に関して次のように述べる。「「水を」は，何を「飲む」のかを明確にしているという点で意味的な修飾であり，「水を」だけでは文構造として成立せず，「飲む」があって初めて成立するという点では、機能的な依存関係があるので，機能的修飾が生じており，句構造分析で一般に行われるように，「水を飲む」を動詞句というまとまりとして扱えば，「飲む」が主要部で，「水を」が補部となり、構造的修飾も生じていることになる」とある。

両方のアプローチは、文構造を意味論の範囲で論じる傾向が強い。確かに、文レベルで現れる［N を］＋［V］だけを取り上げると、このひとかたまりにおける意味的な関係があって成り立っていることは否定しにくい。ただし、目的語と述語がお互いに対して持つ補充性という問題だけではなく、リアルタイムで行われる会話において［N を］が［V］から離れて登場する場合があり、その現象も検討すべきである。自然談話の範囲に触れるような問題のほとんどはまだ解決されていないが、直接目的語が発話を成すほかの

成分・要素とはどのように関わるかということを解明することは、その性質について論じる際に重要な視点である。

3．データについて

直接目的語の遊離現象を観察するに当たって、テレビトーク番組（「極上空間」・BS朝日チャンネル制作）で流れる会話を対象とする。番組の詳細を【表1】にまとめる。

日本語母語話者であるゲストは、1回の放送につき2人ずつ登場する。1回の放送時間は25分程度で、その約80％はゲストのトークが占める。2人のうち1人は運転席に、もう1人は助手席にそれぞれ座り、実際にドライブする様子を撮影している。会話を行う2人のゲストには、何らかの共通経験があったり、長い交際歴を持っていたりする。ドライブコースを自由に決めて移動しながら2人はおしゃべりをする。トークのあらすじはあらかじめ次のように決めてある。①最初は、ゲストが知り合ったきっかけについて話す。②次に、有名になるまでの道、③おもしろい経験、あるいは苦しい経験をしたストーリーを紹介する。④最後に、これから取り組みたい活動などについて話す。ただし、具体的なシナリオは決められていないため、ここに現れる発話は自然談話と考えられる。

5本の放送の会話シーンを取り上げ、その中から直接目的語の遊離形を含む発話のデータを27例抽出した。以下は、データで使用する記号の説明である。

、	短いポーズ
スペース	長めのポーズ
…	言い直しの部分
《》	聞き取れない部分
[]	ジェスチャーの部分
⦃⦄	話し手と聞き手の発話が重なる部分
□	直接目的語成分の直後に出現する挿入要素
＿＿＿	直接目的語成分を示す（一重下線）
═══	述語を示す（二重下線）
〰〰〰	遊離現象が起こるとき述語の前に現れる修飾成分、または挿入文を示す（波下線）
→	発話が次の矢印（→）に繋がるときの表示

【表1】データ出典

放送日	ゲスト情報			スクリプト記号
	名前	年齢（撮影当時）	職業（撮影当時）	
2012年2月11日	工藤公康	48	野球選手	K
	渡辺久信	46	野球選手	W
2012年3月24日	伊藤かずえ	45	女優	I
	南野陽子	44	女優	H
2012年6月23日	井森美幸	43	芸能人	R
	山瀬まみ	42	芸能人	S
2012年8月11日	安めぐみ	30	芸能人	Y
	滝沢沙織	31	芸能人	J
2012年9月29日	世良公則	56	ギタリスト	E
	野村義男	47	ギタリスト	P

4．分析

本節では、遊離現象が起こった結果として成立する発話構造の種類について述べていく。直接目的語の直後に現れる談話標識の機能を考えると、遊離現象には、2種類の要因があることが分かる。まず、話し手が自分の発話を完成させるために行う思考プロセスの影響によって、［N を］の後に談話標識の要素が入るものがある。また、話し手と聞き手が共に談話を進めるために取る行動が［N を］の直後に反映されるものがある。これらはそれぞれ「命題実現」と「談話進行管理」によるものと考えているが、それぞれの仕組みについては4.1. と4.2. で分析する。

以上のような分類は、遊離現象の要因を基準としたものであるが、自然談話の流れが常に変動することによって構造のバリエーションがさらに広がることもある。ひとつの遊離形の中に性質が異なった挿入要素が逐次出現することがあったり、発話の構造が崩れたりすることがある。そこで、遊離形におけるバリエーションの可能性も含めて、その全体の体系を明らかにすることが求められるのである。データの分析結果を踏まえた遊離形の分類を第5節で提示する。

4.1. 命題実現による遊離現象

会話の命題を持ち込む話し手の発話行為には、「伝えたい」と「理解してもらいたい」という2つの根本的な動機が働く。それに従って、話者は言いたいことを言語化し、相手に提示するのである。このように話し手の発話の中で聞き手に命題が伝達されることを「命題実現」と呼ぶ。

話す内容が効率よく伝わるために、話し手が言い方を考えたり、既に発した内容の説明を工夫したりすることが必要となる。このような「考える」プロセスに複雑な計算が必要な場合であれば、話し手が自分の発話を一時止めたりすることがある。その際、遊離現象が発生する箇所にはポーズを置くか、または「考える」プロセスを促すような機能を持つ挿入要素を入れるのである。以下では、この種の遊離現象が［N を］の直後に起こる例について述べる。

4.1.1. ポーズを含む［N を］の遊離形

収集データの中には、直接目的語成分の後に話し手がポーズを置く例が見られた。そのうち、述語成分の直前にポーズが来るものを以下に挙げる。

(2) a．R：普通の人だよ　そのおじさんの背中を［、］流すっていう仕事、ただひたすら洗うの

b．R：あの、いいみたいなのあったじゃん　私《だから》、寮のおばさんに、ベルマークないか？っつって、私、冷蔵庫なんか、おばさん、ないっつってみたいなのを［、］覚えてるもん

c．H：でも、それだとかわいそうだからってゆってね、あの、スタッフの人があの、セットのベッドとかを［、］入れてくれて、楽屋に、そこで生活してたよ、フフ

どの例も話し手R、Hは自分の思い出を語るものである。発話では、「背中を」、「ないっつってみたいなのを」、「セットのベッドとかを」という目的語成分と、述語成分「流す」、「覚えてる」、「入れてくれて」との間に、話し手が短いポーズを入れている。ここでの遊離形とは、遊離現象が起こる範囲が話し手の発話を越えないものである。話し手は発話を

一旦止めるが、発話権は失わない。形成される発話の構造を次のように示すことができる（*S* は “*Speaker*”（話し手）を示す）。

$$S：[\text{N を}]_{Ob} \dashv \varepsilon \vdash [\text{V}]_{Pr}$$

このパターンの構造を「*S* 型構造」と呼ぶ。挿入要素［ε］はひとつ以上入ることが可能である。 直接目的語成分の後にポーズが挿入されてから、述語が発話されるまでの間に話し手が他の修飾成分を入れる例を（3）で載せる。ポーズの直後に、述語を説明する要素が挿入されている。

（3） a．H：こう、目にしたものを、全部言う癖があるみたいで、なんかこう、看板とかあるじゃないですか

b．K：なんであんな速い球が投げれるとか　なべちゃんに話してないかもしれないけどなべちゃんのあの、肘の上げ方あるんじゃない

W：はい　はい、はい

K：肘の、あれを、俺ずっとひそかに練習したんだよ

（3a）のように、Hが述語「言う」を具体化させるために「全部」という一語だけを加えるものと、（3b）のように、Kが「練習した」事情を詳しく説明する「俺ずっとひそかに」という連用修飾成分を加える構造がある。

話し手が入れた挿入文、修飾成分に対して聞き手が反応を表すことによって聞き手側からの挿入要素が加わるものを、（3）で見た遊離形のバリエーションとして（4）で挙げる。

（4） a．E：ジャズメンと一緒にとったってアルバムがあって

P：へえ

E：それを、これ聞いてほしいんだよな

P：へえ

E：渡されて　うん

b．I：ヨーヨーって以外に難しいよね

H：難しい　だから、投げては巻いて、投げては巻いて　→

I：　うん　→

→ H：っていうのを、本当に　→

→ I：うん　→

→ H：嘘じゃなく、100回、1日100回で　やるっていう　→

→ I：うわ、すごーい

→ H：のは日課にしてて

ここでは、話し手が述語の前に修飾成分を入れた後、聞き手が感動詞を発する遊離形を観察することができる。（4a）では、Eが「これ聞いてほしいんだよな」と先輩のミュージシャンからアルバムを渡してもらった様子を説明するのに挿入文を入れると、それに対して聞き手が驚いて感動詞「へえ」と入れている。また、（4b）を見ると、同様に話し手Hがヨーヨーの巻き方を練習したことについて話すとき、「本当に嘘じゃなく」という挿入文と、「100回、1日100回で」という連用修飾成分を並べて入れると、聞き手Iが驚いて「うわ、すごーい」と感動詞を入れる複雑な遊離形が形成されている。挿入要素がひとかたまりのように［N を］と［V］の間に挟まれている。その仕組みを以下のように形式化する（“◂”と“▸”の記号は、挿入要素と感動詞がそれぞれどの成分との意味的な繋がりを持って出現するかを示す）。

(4a)：[N (それ) を] Ob ⊣ [ε (ポーズ)]
[[ε (これを聞いてほしいんだよな)] ◀ [ε (へえ)]]
▶ ⊢ [V (渡されて)] Pr

(4b)：[N (投げては巻いてっていうの) を] Ob ⊣
[ε (ポーズ)] [[ε (本当に嘘じゃなく)] ▶
[ε (100回、1日100回で)] ◀ [ε (うわ、すごーい)]]
▶ ⊢ [V (やる)] Pr

遊離形がポーズを介して現れる（2)、(3)、(4）を見ると、遊離現象は一人の話者の発話の範囲で起こることが分かる。言い換えれば、ポーズが保たれる間、話し手が発話権を取られないようにしているのである。しかし、[N を] と [V] が話し手と聞き手のそれぞれで発話されることもある。そのとき形成される遊離形の例を（5）で観察することができる。

(5)　Y：緊張がほぐれるような　→
　　J：　　そうね　→
→　Y：部分を、要所要所で
→　J：　　使えよう
　　Y：そうそうそう、作ろうっていう話
　　でああいうふうにしたんだけど

(5）は、話し手Yが言い出した発話を聞き手のJが完成させるような会話である。Jが参加したYの結婚式披露宴について感想を交わす談話の一部である。出席する来客が偉い立場の人たちを含めて、披露宴を楽しく面白い雰囲気で過ごすことができるように色々と詳細なことでもアレンジされてあったと、花嫁だったYがコメントする。ここでは、聞き手Jが「使えよう」と発話していることから、「緊張がほぐれるような部分を」が発話されたとき、聞き手のJは、述語を推測することができていることになる。つまり、以前経験したことの記憶に基づき、聞き手が話し手の発話の一部だけを聞くと、その内容全体を先読むことができるのである。聞き手の認識領域に起こるこの現象を「会話の文脈活性化」と呼ぶ。話し手Yのポーズが保たれている間に聞き手Jが発話権を取り、「使えよう」という述語を発話することができるのは、会話の文脈活性化が起こったためであると考える。

(5）にある話し手が発した直接目的語は、聞き手の認識領域にシグナルを送り、[N を] の後に来る発話の構造に影響を及ぼすのである。そのとき発揮される直接目的語の機能を「談話的有力性」と呼ぶことにする。また、このように振る舞う直接目的語を「談話的有力成分」と呼ぶことにする。

聞き手Jは、どんな述語が来るかということについて、目的語成分が表す意味からヒントを受けることも考えられるが、二人は共通経験について話しているところが決定的である。聞き手Jは自分も出席した出来事だったので、話し手Yの言いたいことを正確に理解することができたのである。そのため、話し手Yの発話がまだ完成されないにもかかわらず、聞き手Jの認識プロセスにおいては、その内容が既に全部伝達されていると言える。Jには、「使えよう」と述語を入れてYの発話を完成させようというサポート的な意図があるように見えるが、この場合、すなわち聞き手が発話を完成するのを待たずに、述語を発することには、「はい、あなたの言いたいことが通じたよ」という相槌的なニュアンスがあると考える。

(5）で見たような遊離形を以下のように定式化することができる（*L* は *"Listener"*（聞き手）を示す)。

S：[N を] Ob ⊣
L：⊢ [V] Pr

話し手が［N を］の後で発話を止めたとき、聞き手が発話権を取って［V］を発する側となるものである。このパターンを「*SL* 型構造」と呼ぶ。［N を］の直後に *S* が［ε］を入れることも、*L* の発話の冒頭に［ε］が入ることも可能である。(5) でも見たように、目的語が発話された瞬間、会話の文脈が活性化されるため、聞き手が述語の内容を把握することができる。そして、発話を完成させることもできるのである。

話し手と聞き手の間には共通経験がなくても、話し手が［N を］の直後に言いよどむと、聞き手が一時的に発話権を取り、話し手をフォローするような *SL* 型構造も考えられる。ただし、その場合［V］が上昇調で発話されるので、聞き手が確認のために言っているというようなニュアンスがある。このパターンの遊離形を分析するときは、聞き手の個人差や話し手との親疎関係を参考にすることも重要であると考えられる。

4.1.2.「そのー」類を含む［N を］の遊離形

［N を］と［V］の間にポーズが置かれることで遊離現象が起こる場合と同様の仕組みで成立した遊離形として、直接目的語成分の直後に「そのー」類が現れるものについて述べたい。例を以下に挙げる。

(6) a．P：そのドラマの最中に、あの、今日は、特別な発表があるとかっつて
　　E：うん
　　P：ファンの人たちを 、そのー、 撮影をしてたグラウンドに集めて

b．P：で、ロック御三家って何かっていうと、やっぱ、こう、ツイストがいて、
　　E：{ Char がいて / Char がいて }
　　P：原田真二がいて、みたいなことを 、そういう、 中学生なら《ならでは》の会話ですよ

c．W：辞める時っていうか、来るから、もう本当　でも、そこらへんを 、そのー、 率、まあ、こんだけ長くやるとね、いつ?! みたいな、難しいっすよね

話者が目的語成分の直後に「そのー」、「そういう」を挿入してから、述語を発話するまでの間に追加説明を入れる点では、(3) で観察した *S* 型構造に似たものである。(6a) では、P が「集めて」という述語について「撮影をしてたグラウンドに」と場所を具体的に示す修飾成分を加えている。

(6b)、(6c) を見ると、(6a) と同様に述語が保留されているようになっている。話者が事情や自分の考えをより正確に述べるために、「中学生なら《ならでは》の会話ですよ」、「率、まあ、こんだけ長くやるとね、いつ?! みたいな、難しいっすよね」というような挿入文を入れるのである。しかし、この構造では、［N を］に対応する述語が出現しないままに発話が終わるところが特徴的である。それが S 型構造のバリエーションであると見なされ、［V］が不出現の場合、発話構造を以下のように定式化する。

$$S：[\text{N を}]_{Ob} \dashv \varepsilon$$

この構造の特徴は、述語が発話されないにもかかわらず、それに関わる追加説明を含む挿入文が［ε］の後に入れられる点である。形式レベルでは［V］の位置がそれを修飾する成分の後になるため、挿入文を経て、発話が

述語にたどり着くまで、話し手が発話の構造を変えることになる。

この場合、述語の不出現という現象の原因を検討することに当たって、挿入要素「そのー」の機能を視野に入れたい。それに関して次のような解説がある。暫定的にできあがった発話形式の案とでもいうべきものに「校正」「再検討」を加えるような編集作業の際に用いられる標識であると考えることができる」(cf. 堤良一（2008：28))。その作業がどのようなときに必要となるかという点については、「言い出しにくいような内容を発話する」とき「そのー」を用いることで、言いたいことを「表現形式を複数用意することで，曖昧にしたりうまくごまかしたりしようとするような意図が伝わってしまう」と解説し、加えて「言い訳めいたニュアンスが感じられる」と述べてある（cf. 堤良一（2008：30-31))。即ち、話し手が発話の形式を命題の影響によって変えるのである。(6b)、(6c) では、話者が述語をストレートに言えなくて、適切な言い方をリアルタイムで検索するような形となり、結果として形式上では［V］が現れない構造が形成される。

しかし、自然談話の中で述語の不出現という現象が起こるとき、話し手の発話行為が命題の影響を受けない場合や、話し手と聞き手の間の共通経験の有無など様々な側面から検討すべきだと考える。これは今後の課題である。

4.1.3.「こう」を含む［N を］の遊離形

述語成分が表す「動作」についてその「やり方」を説明する要素が取り入れられる遊離形について次に述べる。この場合、追加説明には「こう」という副詞的な意味合いがある挿入要素が利用される。

(7) a．P：特に、そのー、うん、目的地を、こう、決めて
　　E：うん
　　P：一緒に行くの自体が初めてだから
　b．H：私もヨーヨーを、こう［手でやり方を見せる］、投げるときの、こう、ね
　　I：うん、決まりがあるんだね
　c．I：どんなことをする、そこ？
　　H：んー、ま、喫茶店なんで、オーダー取りに｛行って、／行って、｝で、→
　　I：《》
→　H：お茶とかをね、お出ししたり、お水を、こう［示しながら］、注ぎに《要ったときに》行ったりなんだけど

(7a) の「目的地を、こう、決めて」では、「こう」が「今日みたいに、前になかったように、あらかじめ、二人で、自由に」というような意味を持つことは話し手と聞き手がともに分かることである。それは、会話参加者がシェアする経験の文脈があるため、それを指示する「こう」が挿入されることによって、二人の認識領域においては、述語「決めて」の意味が具体化させられるのである。また、(7b)、(7c) では、話し手が追加説明を付けるために挿入要素「こう」に合わせて、ジェスチャーを重ねているのである。(7) の場合、目的語「目的地を」、「ヨーヨーを」、「お水を」の後に「こう」が入るが、その後はすぐに述語が続く *S* 型構造である。しかし、「こう」の次に追加の挿入要素が入るそのバリエーションも可能であり、その例を (8) で挙げる。

(8) a．H：なんかね、いろんなのを、こう、仮面ライダーってこう、変身ポーズとかある →
I：うん、うん、うーん
→ H：んじゃないですか　あんな感じで、お前ちょっと三つぐらい考えてこいとか言われて

b．H：なんか、もうさ、もう帰る場所がないっていうか、 →
I：　　でもそうだよね
→ H：なんかこう自分で来た、存在したなんか意味を、こう、ね、ここでなんかこうちゃんと出したくて

(8a) では、女優経験を語るHがキャラクターをどのように考えさせられたのか説明するために、「こう」を通して文全体「仮面ライダーってこう、変身ポーズとかあるんじゃないですか」を導入するのである。なお、その文に伴って、聞き手が「うん、うん、うーん」と相槌を打つ。話し手の発話において、「いろいろなポーズを考えさせられた」という内容が伝達されてある。しかし、冒頭には目的語「いろんなのを」を発すると、話し手が一旦止まって、今度それについてより具体的に述べようと目的語を含む部分を言い直すのである。そのため、発話の構造が途中から変えられ、目的語「いろんなのを」までの発話の冒頭部分は未完成のままに残されてあるため、それに対応するような述語が発せられないのである。

(8a) と (8b) の仕組みを見ると、「こう」と一緒に挿入文とそれに対応する聞き手側からの相槌が挿入されることと、終助詞「ね」が「こう」に付けられて現れることに気づく。(8a) では、仮面ライダーについての共通認識があるため、Iが相槌を打って会話を促進するのである。また、(8b) でも、Hが「こう」の後に「ね」を挿入することで聞き手に呼びかけを送るのである。つまり、命題実現によって挿入要素が入って遊離現象が起こる際、それに重ねて話し手と聞き手との間のもうひとつ別のやり取りが行われる。この場合、一種の入れ子構造が形成されると考える。形式化してみると、以下のような形になる。

(8b)：[N (意味) を] Ob ┤ [ε (ポーズ)]
[ε (こう) [ε (ポーズ)] ◀ [ε (ね)]
[ε (ポーズ)]] ▶ [[ε (ここでなんかこうちゃんと)]] ⊢
[V (渡されて)] Pr

基本的に、ポーズ、「そのー」類、「こう」という挿入要素の出現は、話者が適切な表現を検索するという心内処理を行うことによって誘発される。ただし、自然談話の中で［Nを］の直後に入れられたポーズや「そのー」類は、表現選択、または話し手自身の回想と発話自体をつなぐ言いよどみである。一方、「こう」が挿入される場合、追加説明に使われる情報はその会話の外部から取り入れられている。なお、その情報リソースは、会話参加者の共通認識、あるいは共有する経験に基づくものである。ところで、(8b) の中に「ね」という聞き手の共感を求めるような談話標識が「こう」に繋いで出現することが可能なのは、会話参加者の共通認識を前提とする[i]。

4.2. 談話進行管理による遊離現象

会話参加者である話し手と聞き手がお互いを意識しながら談話を進めていくため、話し手が聞き手の注目を誘ったり、または、逆に、聞き手が聞いた内容を理解したことを話し手に証明したりすることがある。このよう

な発話行為を以って談話進行の管理が行われる。そのとき、発話の途中でも終助詞「ね」、聞き手側からの相槌が出現することがあって、本節では、それらが直接目的語の直後に現れる構造について考察する。

4.2.1.「ね」を含む［N を］の遊離形

話し手が直接目的語成分に「ね」を付けることでその内容に焦点を当てようとするような発話のデータが観察された。まず、(9) では、挿入要素に続いて述語成分が発話されるものを挙げる。

(9) a．R：今日はさ、懐かしい所とか
S：へえ、どこだろう？
R：思い出の
S：思い出のルート？
R：なんか、エリアを ねぇ、回ろうかなと思うのでな

b．P：だから、実質ちゃんと、あの、話を ねぇ、するようになって、お互いがね、こんなにギターが好きなんだよ、バトル合戦が始まるのが、そのー、やっぱ、楽器屋が最初ですよね

c．I：どんなことをする、そこ？
H：んー、ま、喫茶店なんで、オーダー取りに｛行って、／行って、｝で、→
I：《》
→ H：お茶とかを ねぇ、お出ししたり

厳密に見ると、挿入要素が「ね」のみではなく、ポーズも必ず一緒に入っている。話し手が「エリアを」、「話を」、「お茶とかを」という目的語成分を「ね」を通して強調する。その次に、述語の表現検索が行われるため、ポーズを置くのである。即ち、遊離現象が起こった際、命題実現と談話進行管理をめぐる心内処理が行われる。形式上では、それは挿入要素が連続して現れる遊離形の中で反映されるのである。

終助詞「ね」の基本的な機能に関して、それを発する話し手が「聞き手との間に共通認識領域・共感領域を作りだそうとしているのだと思われる」（伊豆原英子2001：40）という考えがある。このような機能を持った談話標識が直接目的語の直後に（つまり、発話全体が未完成の段階で）現れることによって［N を］が孤立させられるのである。この場合、話し手は［N を］を［V］から意図的に遊離させるのであり、恐らく聞き手の認識領域においても［N を］が［V］から離された状態で取り入れられていると思われる。

また、「ね」＋ポーズという挿入要素に加え、述語に関する追加説明が入る例と、「こう」＋追加説明が入る例を次に提示する。

(10) a．S：あれ、それで、しかも、それを ねぇ、カメラは遠くから撮ってるから

b．E：君の音楽を ねぇ、こう、アルバムくれたんで、僕もお返しって言って、こう、くださったんだけど

話し手は、目的語「それを」、「音楽を」に「ね」を付けて聞き手に呼びかけを送ると、そこで発話が一旦を止められる。その後、(10a) では修飾成分「カメラは遠くから」によって撮影の仕方を説明する。

(10b) では、E が尊敬する先輩ミュージシャンに、自分が作った音楽をどのように紹介したかということを説明する。目的語「音楽を」の直後に「ね」と「こう」が挿入することで遊離形が形成する際、述語「くれた」の前に「アルバム」という一語が加わる。述語と対応する成分であるため、発話の構造は

(8a) で述べたものと似たような仕組みである。話し手が発話の冒頭に直接目的語を言い出したにもかかわらず、その直後に遊離を起こし、途中で言い直すように構造を変えるのである。その上、「音楽を」に対応するような述語が発せられないのである。

4.2.2.「うん」、「はい」類の相槌を含む［Nを］の遊離形

直接目的語成分の発話の直後に聞き手が相槌を打つことによって、遊離現象が見られることがある。［Nを］の後に「うん」が入るものを（11）と（12）に挙げる。

(11) a．P：で、なに、事務所のほうにお願いしたのは、あの、テレビの待ち時間とかの時間もレコーディングをしたいので
E：うん
P：えー、テレビを
E：うん
P：ちょっと減らしてくれと

b．E：君の音楽をね、こう、アルバムくれたんで、僕もお返しって言って、こう、くださったんだけど　あの、一番はやっぱり、その、音楽をやってる人間っていうところを
P：うん
E：こう、ちゃんと、こう、見てくれてるっていうところが、やっぱり面白かったね

c．E：実は、まあ、あの、裕次郎さんが、あの、そのアマチュアのポプコンに入れてるころの俺を
P：うん
E：ご覧になってて

話し手P、Eが目的語成分「テレビを」、「音楽をやってる人間っていうところを」、「俺を」を発話した後、短いポーズを置くところがこの構造の特徴である。そのポーズの間に聞き手が「はい、聞いています」という意味で「うん」を入れる。その後、話し手が発話権を持ち続けたまま発話を完成させるのである。(11c) のように、挿入要素の直後に述語成分が発話されるものもあれば、(11a)、(11b) のように、述語成分に関わる修飾語（「ちょっと」、「ちゃんと」）や話し手側からの「こう」が加わるものもある。

話し手が［Nを］の後に発話を一旦止めると、ポーズが続いているうちに聞き手が相槌を打つとき形成される遊離形を以下のように定式化することができる。

S：［Nを］$_{Ob}$ ⊣
L：ε
S：⊢［V］$_{Pr}$

この形式を「S_1LS_2型構造」と呼ぶ。話し手の発話中に聞き手側からの［ε］が入ることは発話権交替のきっかけとなっている。しかし、そのあと発話を完成させるために、話し手が発話権を取り戻し、述語を付け加えるのである。

また、(12) では、(11) と同様に話し手が目的語成分を発話してから聞き手が相槌を打つのであるが、「オンエアの日を」に対応する述語が出現しない。

(12) P：たまたま、その、オンエアの日を
E：うん
P：僕がこう、車を運転して、僕が車でラジオ《》ですけど
E：うんうん
P：世良さん番組やってて、ああ、世

良さんだと思って、ただ聞いただけなんだけど

ここでは、EがPのレコードをラジオ番組で紹介したとき、自分がそれを運転しながら車の中で聞いて相手の態度に感動したということについてPが話している。目的語成分「オンエアの日を」を発してから発話を一旦止めるのは、その出来事の設定について説明を加えるためであると思われる。そのため、聞き手が相槌を打ってから話し手が挿入文を入れている（挿入文に対しても話し手が相槌を打つ）。しかし、挿入文の発話の後に、既に発せられた目的語成分に対応するような述語が出現されないのである。この場合、S：⊢［V］$_{Pr}$ の部分が現れない構造は S_1LS_2型構造のバリエーションであると考える。なお、話し手が発話の構造を途中で変えるという点では、(8a)、(10b) にも観察していた現象と似ている[ii]。

直接目的語が発話されると、聞き手が相槌を繰り返して打つ例を（13）で紹介する。

(13) a．P：ちょうど、世良さんに、僕の、その時に作ってた
E：うん
P：ソロアルバムを
E：うんうんうんうんうん
P：渡したんっすよ、聞いてくださいって言って
E：うんうんうん
b．E：えー、音楽という社会にちゃんと就職を
P：はいはいはいはい
E：します

この会話でのやり取りを見ると、S_1LS_2型構造が形成されることを観察することができる。「うん」、「はい」が反復された挿入要素は、聞き手が相槌を単独で挿入する場合と同様に、話し手が目的語を発した後、ポーズを置くときに入れられる。意味的には、「うん」、「はい」の反復が聞き手の「とてもよく理解しています」というような強い共感を表すと考えられる。(13a) では、Pが話すことはEと共に経験した出来事である。従って、会話は2人の回想に基づいているため、話し手の発話の内容は聞き手にとって既知である。また、(13b) を見ると、E、Pともにミュージシャンであり、同じ音楽ジャンルで活躍してきたので、プロギタリストになるまでの道というような話題は二人にとって身近なものである。そこで話し手の発話の内容に対して聞き手が共感を持つので、発話の途中に「うんうんうん」、「はいはいはい」を入れ、最終的に直接目的語の直後に相槌が入る遊離形が形成される。

このような遊離形が形成されることが可能となるには、話し手と聞き手が共に分かる会話の文脈があることが条件であると考えられる。そうすると、話し手が［Nを］を発話した時点で、聞き手は話し手の言いたい内容を完全に（まだ発話されていない述語も含めて）理解したという反-応が起こる。つまり、(13) にある「ソロアルバムを」、「就職を」という目的語の発話は文脈活性化を起こす成分であるとこの構造を解釈する。

5．まとめ

5.1. 直接目的語の遊離形のパターン

本節では、第4節で述べてきた直接目的語の遊離形の定式化をまとめて述べる。上述のように、データ分析結果に基づき、形式上では遊離形を3つのパターンに分けることができる。この分類の基準は、話し手と聞き手

が発話権を取るターンの交替が行われるか否か、また行われる場合、どのような取り方であるかという見方である。それによって、SL 型構造、S 型構造、S1LS2型構造という3つのパターンの遊離形が形成される。それぞれの中で、いくつかのバリエーションが可能である。本稿で観察してきたそのすべてを以下【表２】に載せる。

遊離形における挿入要素と［N を］、または［V］との意味的な関わり方を見ると、次のような関係に気づく。①*S* 型構造において、［N を］の直後に置かれるポーズ、「そのー」類の要素、「こう」は、命題実現によるεであり、述語表現の検索をめぐる心内処理が行われるときに出現するのである。一方、①*S* 型構造に現れる「ね」、及び②S_1LS_2型構造に現れる相槌、相槌の反復の例を見ると、そのすべてのεは談話進行管理によるものであり、意味的には［N を］と結ばれている。また、③SL 型構造に関しては、4.1.1. で述べたように、話し手の発話が未完成の状態で聞き手が述語を発話する場合には、聞き手の発話には相槌を打つときと同様な役割を持つ。即ち、聞き手の発話は、話し手が発話した［N を］に対して反応するものである。

5.2. 遊離形の中で現れる直接目的語のあり方

談話の流れに伴って、話し手が行う表現検索をめぐる様々な心内処理が発話の構造に反映される。その中で、会話参加者の共通認識（事前に作られたもの）の有無、会話文脈（会話によって作られたもの）の影響の有無というような条件がある場合、発話の構造は話し手があらかじめ計算できない方向に変わっていくことがある。本稿では、その変更が発生する位置が直接目的語の直後となることに注目したい。それは、直接目的語と述語の間に挿入要素が入り、その結果として形成される遊離形を見ると、直接目的語が述語から離れた状態でそのあり方を観察することができるためである。

まず、*S* 型構造において、直接目的語が既に発話された後、述語表現の検索をめぐる心

【表２】直接目的語の遊離形パターン

遊離形パターン	［N を］直後の挿入要素	バリエーション構造	バリエーションタイプ
① *S* 型構造 *S*：［N を］$_{Ob}$ ⊣ ε ⊢［V］$_{Pr}$	ポーズ そのー（そのー類） こう ね	*S*：［N を］$_{Ob}$ ⊣ ε	述語不出現
		S：［N を］$_{Ob}$ ⊣ ε　修飾語 ⊢［V］$_{Pr}$	連用修飾語が現れる
		S：［N を］$_{Ob}$ ⊣ ε　挿入文　*L*：　ε ⊢［V］$_{Pr}$	聞き手が感動詞を入れる
		S：［N を］$_{Ob}$ ⊣ ε1　ε2　挿入文 ⊢［V］$_{Pr}$	複合挿入要素
		S：［N を］$_{Ob}$ ⊣ ε1　ε2　修飾語 ⊢［V］$_{Pr}$	複合挿入要素
② S_1LS_2 型構造 *S*：［N を］$_{Ob}$ ⊣ *L*：　ε *S*：⊢［V］$_{Pr}$	うん うん／はいの反復	*S*：［N を］$_{Ob}$ ⊣ *L*：　ε *S*：修飾語 ⊢［V］$_{Pr}$	連用修飾語が現れる
		S：［N を］$_{Ob}$ ⊣ *L*：　ε *S*：ε1　修飾語　ε2 ⊢［V］$_{Pr}$	複合挿入要素
		S：［N を］$_{Ob}$ ⊣ *L*：　ε	述語不出現
③ *SL* 型構造 *S*：［N を］$_{Ob}$ ⊣ *L*：⊢［V］$_{Pr}$	ポーズ／なし	－	－

内処理が行われる必要があると見ると、［V］に対する［N を］の補充性が疑われる。特に、挿入要素が2つ以上入る相対的に複雑な遊離形の中では、挿入要素が述語の内容について説明する挿入文、あるいは文脈を導入するとなると、［N を］が［V］の意味を具体化させるという機能を果たしていないように思われる。その上、［N を］が、発話された後の会話の流れには全く影響を及ぼさない孤立した成分として出現する。

一方、*S* 型構造において［N を］に「ね」が付く遊離形と、S_1LS_2型構造、*SL* 型構造において、［N を］に続く挿入要素は、談話進行管理をめぐる心内処理に携わって現れるものである。その場合、［N を］がその直後に聞き手側からの発話を招く成分である。本稿のデータ（5）、（9）、（10）～（13）の中で観察した直接目的語には、談話的有力成分の機能が備えてあると見なす。

このように、話し手と聞き手の発話が交替する段階を経て談話が進んでいく環境の中で、遊離形における直接目的語のあり方は二通りである。それを次のように【図１】と【図２】で示すことができる（【図２】は、［N を］が談話的有力成分である場合において後置の発話に関わっていることを示す）。

６．今後の課題

自然談話の中での直接目的語を見て、述語から離れた状態であるからこそ、それが発揮する性質の特徴を観察することができる。同時に、自然談話の中で見るので、まだ判明できない問題点もある。

本稿で提示したい直接目的語の談話的有力性の要因を論じる際、それが話し手の発話における［N を］と、会話全体の文脈との関わり方による現象であると推定してもいいだろう。上記例では、（5）にある「緊張がほぐれるような部分を」、（13）にある「ソロアルバムを」、「就職を」という目的語の成分がどの文脈で発話されているのか聞き手が事前に分かっているゆえに、その段階で反応を表すことができると察する。即ち、会話の背景には文脈がすでに作成されてあれば、話し手が発する目的語は、その発話の内容と聞き手の認識領域に属する話し手の発話内容に関する情報の部分をつなぐものとなる。その結果、聞き手による理解プロセスが促進され、それについて話し手にも何らかの言語行動（相槌を打つこと、発話を完成させること）を通して表明することになる。

ここで困難なのは、遊離された目的語が、聞き手が所有する情報のどの部分と、どのように一致するかということを具体的なかたち

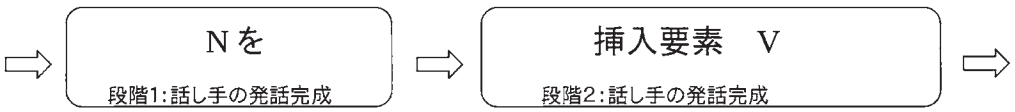

図１　命題実現による遊離形の中の直接目的語のあり方

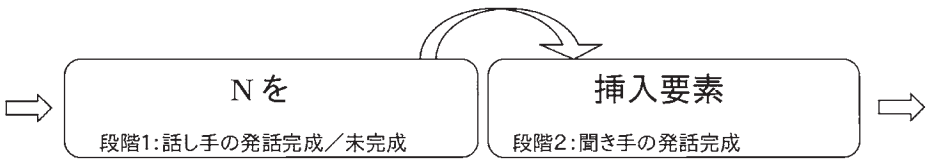

図２　談話進行管理による遊離形の中の直接目的語のあり方

で確かめるアプローチがないことである。直接目的語の発話が聞き手側からの反応を起こすのであれば、それが聞き手の認識領域に属する（言語化を通して表明されていない）ある要素と対応するためであろう。しかし、事前に共有された文脈があるとしても、聞き手の認識領域に、話し手が発する目的語とまったく同じ概念を含む要素がすでに保存されてあることも考えにくい[iii]。その場で流れていく会話、その場で発展させられている命題を背景にして、直接目的語には、聞き手を命題のある部分だけに焦点を絞り込ませるような働きがあることについて検討ができるような手掛かりが求められる。そこで、直接目的語が出現するまでの段階で、会話の流れとともに情報が蓄積されていく談話単位と、直接目的語との関連性（[N を] が遊離されるケースと遊離しないケースの対比を含めて）を検討することが大きな課題として残されてある。

7．おわりに

文レベルで登場する直接目的語は、述語の意味を補完する成分であるというように定義される。あるいは、捉え方によって、述語が直接目的語である名詞の意味を具体化させる成分であるという論じ方もある。また、どのように見ても、「絵を描く」という直接目的語「絵を」と述語「描く」の構造には、両方の成分がお互いの意味を具体化させることが否定できないとしても、文におけるそれぞれの役割を《動作対象・動作》というように従属関係としてだけ論じることはあまりにも単純であろう。

自然談話の中では、発話は、直接目的語が述語と隣接した構造（連結形）だけではなく、直接目的語の直後に挿入要素が入る構造（遊離形）で現れることもある。第4節では、遊離現象が起こる要因を2つに分けて考察してきた。それは、命題実現及び談話進行管理の必要性という要因であり、それぞれによって、発話中に様々な挿入要素が現れ、構造のバリエーションが生まれるのである。

自然談話における［N を］＋［V］の現れ方についての研究はいまだ殆どされていない。文レベルでは見られない、自然談話の環境における直接目的語の振る舞いを検討することによって、その性質について異なる視点から解明することを試みることは有意義である。

注

i　挿入要素「ね」は、「こう」の直後に出現する一方、「そのー」類など表現検索によって挿入されるフィラーの直後には出現することができないと仮定する。その原因は、後者の場合、話し手が聞き手との共通認識があることを要求しないためであると考えられる。しかし、この現象を検証するためには、別途言語実験を設ける必要があるため、検討は今後の課題とする。

ii　このような場合、話し手が発話構造を変える原因としていくつかのものが考えられる。そのうち、「オンエアの日」という成分が時間を表す修飾成分として発話の冒頭に置かれる可能性もある。そこで、述語不出現という現象について様々な可能性を視野に入れて別途分析を行うべきである。

iii　内田聖二（2011:159）を参考にする。氏は、Sperber & Wilson（Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.）の考え方を紹介する際、次のようにまとめる。「つまり、文脈とは発話の解釈プロセスが始まる前に事前に決定されているものではなく、発話を処理するときに同時に形成されるものと考えるのである」。

参考文献

伊豆原英子（2001）「「ね」と「よ」再考考」『愛知学院大学教養部紀要』49（1）愛知学院大学 p.35-49
井上和子（2009）『生成文法と日本語研究―「文文法」と「談話」の接点』大修館書店
内田聖二（2011）『語用論の射程―語から談話・テクストへ』研究社
影山太郎（2011）『日英対象―名詞の意味と構文』大修館書店
加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ研究叢書 言語編 第29巻 ひつじ書房
定延利之（2010）「会話においてフィラーを発するということ」『音声研究』14（3）日本音声学会 p.27-39
――――・田窪行則（1995）「談話における心的操作モニター機能―心的操作標識「ええと」と「あの（ー）」―」『言語研究』108 日本言語学会 p.74-93
田窪行則（1994）「音声対話の言語学的モデル：談話管理標識としての感動詞の分析」『音声言語情報処理』90（40）一般社団法人情報処理学版 p.15-22
――――（2010）『日本語の構造・推論と知識管理』くろしお出版
堤良一（2008）「談話中に現れる間投詞アノ（ー）・ソノ（ー）の使い分けについて」『日本語科学』23 国書刊行会 p.17-36
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 第Ⅰ巻』くろしお出版
――――（1991）「構文要素の結合と拡大－連用と連体」『日本語のシンタクスと意味 第Ⅲ巻』くろしお出版 p.193-292
仁田義雄（2010）『日本語文法の記述的研究を求めて』ひつじ書房
橋内武（1999）『ディスコース―談話の織りなす世界』くろしお出版
長谷川信子 編（2010）『統語論の新展開と日本語研究：命題を超えて』開拓社
早津恵美子（2010）「連用修飾語の解体―再構築にむけて」『国文学：解釈と鑑賞』75（7）ぎょうせい p.60-68
藤井洋子（1991）「日本語文における語順の逆転：談話語用論的視点からの分析」『言語研究』99 日本言語学会 p.58-81
丸山岳彦（2014）「『日本語話し言葉コーパス』に基づく挿入構造の機能的分析」『日本語文法』14（1）日本語文法学会 くろしお出版 p.88-104
メイナード K.泉子（1993）『会話分析（日英語対照研究シリーズ（2））』くろしお出版
山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版